

art 諸橋近代美術館

「ショック・オブ・ダリ ～サルバドール・ダリと日本の前衛～」



米倉壽仁
《ヨーロッパの危機（旧題「世界の危機」）》
1936年
山梨県立美術館蔵



難波香久三
《蒋介石よ何処へ行く》
1939年
板橋区立美術館蔵

シュルレアリスム(超現実主義)を代表するスペインの芸術家サルバドール・ダリが日本に初めて紹介されたのは1930年代のことでした。1933年頃からダリの絵画は美術雑誌などを通して日本で紹介されるようになり、30年代を中心に数多くの作品が日本の美術雑誌に取り上げられるようになります。当時の日本の芸術家たちは小さなモノクロ図版を中心としたダリの作品画像に衝撃を受け、30年代後半、特に若い前衛画家たちの作品にダリの影響が見受けられるようになります。ダリの影響として特に顕著だったのが、ダリ作品に頻出していた地平線を望む構図やダブル・イメージ(二重像)と呼ばれる表現技法の引用でした。

しかし、ダリの引用が著しいあまりに、それは一過性の「ダリブーム」とも呼べる潮流に触発された模倣と受け止められ、今日まで日本におけるダリの影響が検証される機会はほとんどありませんでした。ですが、そこにはダリの作風の模倣だけでは片付けられない、若き芸術家たちの思惟や想念が現れていました。諸橋近代美術館で6月27日(日)まで開催している「ショック・オブ・ダリ～サルバドール・ダリと日本の前衛～」展では、これまで検証される機会の少なかったダリの日本受容に焦点を当て、ダリが日本にもたらした影響を、ダリ作品と前衛画家たちの作品とをかつてない規模で比較展示することで検証し、単なる模倣にとどまらない日本の前衛表現であったことをご紹介します。

例えば、米倉壽仁の「ヨーロッパの危機(旧題「世界の危機」)」は、発表当初からダリの影響が指摘されていた作品ですが、一方でタイトルにもある通り、第2次世界大戦へと連なる火種が燃えるヨーロッパに対する危機感が如実に表されています。また、難波香久三(架空像)の「蒋介石よ何処へ行く」という作品では岩山が人の横顔とのダブル・イメージになっておりダリの影響が読み取れる一方で、抗日戦線へと向かう中国の蒋介石への批判が明確に示されています。彼らはダリの作風を引用しつつも、単に非合理的な世界を描くのではなく、不穏な緊張の張り巡らされた社会情勢に対し、絵画という表現方法で、自身の想いを打ち出して行ったのです。

「ダリ」という「表現言語」を獲得することで昇華された、模倣にとどまらない日本の前衛画家たちの革新的な表現の数々を、ぜひ本展でご堪能ください。
(学芸員 佐藤芳哉)

Shock of Dalí ショック・オブ・ダリ ～サルバドール・ダリと日本の前衛～

会期：2021年4月24日(土)～6月27日(日) 会期中無休
会場：諸橋近代美術館(福島県耶麻郡北塩原村大字桧原字剣ヶ峯1093番23)
時間：9時30分～17時00分 ※入館は閉館時刻の30分前まで
観覧料：一般1,300円 高校・大学生500円 中学生以下無料

会期中、美術館の周囲は裏磐梯の極上の深緑に包まれています。是非、お出かけください。

私のフランス語日記

Une société sous surveillance

Je me suis rendu 5 fois avant l'apparition du COVID-19 en Chine ces quatre dernières années pour visiter des régions des minorités dans la province du Sichuan 四川省 et dans la province du Guizhou 貴州省. Chaque séjour était de 15 jours parce que les Japonais n'ont pas besoin de visa pour moins de 15 jours. Grâce à la diminution des villages fermés aux étrangers et la mise en place d'un réseau autoroutier et d'un réseau ferroviaire à grande vitesse partout et le développement de l'intelligence artificielle, l'on peut voyager facilement sans guide.

Auparavant, il fallait plus de dix heures pour atteindre la destination, aujourd'hui il ne faut que 2 ou 3 heures pour aller près de la destination par le train à grande vitesse ou par un réseau autoroutier. Mais les villages des minorités sont généralement loin de là, et il faut encore prendre le bus local.

Il y a quelques années, il a fallu faire la queue pendant quelques heures dans la gare pour acheter des billets. Maintenant l'on peut prendre des billets par Internet au Japon. C'est mieux si l'on peut recevoir tous les billets à n'importe quelle gare en présentant le passeport et l'écran de smartphone. En plus, le tarif est très bon marché, un billet de train à grande vitesse ne coûte que 2 ou 3 mille yen pour 300 kilomètres.

Ces deux dernières années, j'ai visité des villages des minorités dans la province du Guizhou 貴州省, c'est-à-dire les Miao ミャオ族, les Dongs 侗族, les Yi 彝族 etc. A la différence de ce qui se passait dans l'Est du Tibet, il n'y avait pas de contrôle d'identité dans la rue au Guizhou. Les habitants vivaient tranquillement, je ne me suis pas fait rouler dans un restaurant. Ils étaient très gentils. Mais la surveillance est de plus en plus stricte. Les caméras de reconnaissance faciale sont partout. Avant il fallait montrer le passeport à la gare, maintenant il suffit de regarder la caméra à l'entrée. Il me semble que toutes les données sont enregistrées à l'aéroport. Le visage de voyageur est scanné et puis l'ordinateur le compare avec une base de données.

Ce qui était le plus surprenant, c'était le distributeur automatique à l'aéroport, il a suffi de prendre position face à la caméra et puis appuyer sur un bouton, la boisson est sortie de la machine. Je pense que l'appareil analyse le visage et prélève le montant dû sur son compte. C'est impossible pour les étrangers sans compte en Chine. Le gouvernement chinois surveille les habitants avec les caméras intelligentes, il ne serait pas nécessaire de contrôler dans la rue. Au Japon, l'on parle de l'atteinte à la vie privée, il arrive des fois qu'il est difficile d'avoir des informations nécessaires même en cas d'urgence.

Tant mieux pour moi au Japon.

Takashi HASEGAWA

監視社会

コロナの発生前四年間で5回ほど四川省及び貴州省の少数民族の居住地を訪ねた、一回当たりの期間はヴィザ無しで滞在できる15日間であった。これが可能となったのは、中国政府による未開放地区の減少と全土にはりめぐらされた高速道路、中国型新幹線網の充実、更にはAIのおかげである。

以前は10時間以上掛かったのが高速バスや新幹線で目的地の近くまでは数時間で行ける、但しそこからは相変わらずローカルバスのお世話になる。

数年前までは、中国の列車の切符の購入は大変で駅で何時間も並ばなければならなかった。現在は日本からネットで購入出来る、しかも全ての路線の切符を中国のどの駅でもパスポートとスマホの予約確認の画面を提示すれば一括して受け取れる。更に有難いのは交通費が大変安い、新幹線だと400キロぐらいの距離で2、3千円ぐらいである。



貴州省 肇興の街中

ここ2年は貴州省の少数民族地域を訪ねた。即ちミャオ族、侗族、彝族等の集落である。貴州省ではチベット地域の時と違い、公安の検問が一切なかった、皆んな穏やかに生活しており、食堂でぼられるような事も無かった。但し監視の目は益々厳しくなっていると思われる、至る所にカメラが設置してあり、それも顔認証カメラのようである、以前駅ではパスポートコントロールがあったが、現在はカメラに顔を向ければ全てOKである、どうも全ての情報が空港に到着した時点で入力されているようだ。旅行者の顔をスキャンするとコンピュータがデータと照合するようだ。

特に驚いたのは、空港の自動販売機で、カメラに顔を向けて購入したい物のボタンを押すと出てくる、銀行口座から直接引き落としになるようだ。中国に口座の無い外国人は利用できない。このようにがっちりAIで監視しているので街頭での検問は不要なのだろう。日本では個人情報保護が常に問題になって、災害時すら必要な情報が取得できないことも有る。

しかし自分は日本でラッキー。

(会話教室受講生 長谷川 孝)

今回は、貝沼実千代さんお願いします！



「キムチとオンドル」を出版された 会員の鈴木淑子さん(87歳)にインタビュー

随筆を自費出版(文芸社刊)され、幼少期の韓国での、情景を自分の国家観も交えて書かれています。現在も創作意欲は衰えておらず、福島ペンクラブ五月会会員、県現代詩人会員として活躍中です。
(鈴木淑子さん写真 福島民報社提供)

——1934年(昭和9年)平壤・京城育ちだそうですが、ご近所やご家族の暮らしは如何でしたか。

鈴木: 当時の朝鮮半島は日本の支配下にあつて現在とは全く事情が違っていました。現地人とは住み分けして人情に変わりはありません。ただ山は緑が少なく、満蒙から吹いてくる風は身を切るように冷たくてオンドルの温かさに救われたものです。私の住んでいた場所は李王朝の旧王宮近くでしたから王朝の特権階級の友人がいて、伝統的な韓国のヤンバン(両班=特権階級)の家も見ましたし、通学路の途中で韓国人の庶民の生活ぶりなども見ました。それは天と地ほどの違いがあつた。異国文化とは思いませんでした。ただ珍しかった。ヤンバンと庶民の両方の暮らしを見聞できた日本人は少ないと思います。

——終戦前後のご苦労や、日本帰国までのエピソードをお聞かせ下さい。

鈴木: 太平洋戦争中朝鮮は一度も爆撃されませんでしたから、本当の悲惨な状況は一度も目にしないですみました。帰国の時は南鮮の釜山近くにいましたから年内に帰国できました。北朝鮮の国境近くにいた方々は筆舌に尽くせないご苦労があつたと聞きます。ソ連軍に追われた北朝鮮在住の日本人は言語に絶する苦労をされたと聞きます。福女と同級生で頭を坊主刈りにし顔に煤を塗って逃れてきた人がいました。帰国後北朝鮮脱出記録が沢山出版されたものです。いざという時、政府や軍隊は頼みにならないという事は知っていた方がいいと思います。最終的には各個人の判断によって運命が決まります。情報が遮断されると状況の判断が難しくなるので、情報は命綱です。

——文学に興味を持たれたのは何でしょう。

鈴木: 「キムチとオンドル」に書きましたが、幼児期私は病弱でしたので外出禁止の期間が非常に長かった。自然と文字に親しむようになりました。心の糧だつたと思います。童話から物語へやがて小説へと文学に親しむ範囲は広がりましたが、外国文学に出会つたのは戦後でした。英米独露仏などの文学にのめり込んだあの時期は私の青春で天国でした。詩との出会いはずっと後のことです。今でも現代詩は難しくてせいぜい高村光太郎、萩原朔太郎どまりですが、自分で書いてみると詩の文脈みたいなものが読めて

くるようで楽しくなりました。でも自分で書くものが詩であるかどうか判じかねているところです。

——高齢化時代に87歳を迎えて健康でいる秘訣、信条などをお伺いします。

鈴木: 特に意識したことはないのですが、自分を甘やかさないことが第一だと思います。多少の病気を抱えていても普通の生活ができれば当たり前前に自立して、他者からの協力や援助は家族であっても出来るだけ当てにしない方がいいと思います。誰もが自分のことで精一杯なのです。自分一人だと精神的にも気楽だし、好きなことも気兼ねなくできる。年を取つたからと言って他者に依存しては、本当の自分も衰えていくし、自分も見失ってしまいます。自然の営みによれば「人は一人で生まれ、一人で死ぬ」ことに決まっているのですからその覚悟を忘れないことです。そのための心の準備はいつも怠らないように心掛けている心算です。だいが偉そうなことを言つてしまいましたがそのように思っています。



焼失前の南大門

1400年代に建立され、2008年に焼失。2014年に復元。

——「キムチとオンドル」出版後の感想は如何ですか。

鈴木: 本を出してみても予想外のことが分かりました。それは私の年が「87歳」だという驚きでした。「人生百歳まで」と言われる現代ですが実際の社会的認識としては75歳だから、85歳だからもう「人並み」ではないという扱いが常識で、半ば公認されています。そのことへのアンチエイジングとして今回の出版が受け止められたようで、結果として高齢の方々に勇気づけました。もう一つ痛感したのは、現在八十歳以下の年齢層の一般の日本人は全く戦争について認識も関心も希薄だという現状です。太平洋戦争も朝鮮戦争も年表的認識しかないようで、戦場の実情や庶民の受ける悲惨さなど考えても見ない。現在の日本は平和すぎて不安を感じてしまいます。

フランスの家庭料理 ガレット

有名な世界遺産モンサンミッシェルのあるブルターニュ地方は長い間「そば粉」が主食として親しまれてきたそうです。今回紹介するガレットはブルターニュ地方の伝統料理です。

30年前にオランダで新婚生活を送っていたある日、うどんを作ろうと思って、スーパーで小麦粉らしき物を買ってきました。開けてみると黒っぽい色をしていました。こういう種類の小麦粉を買ってきたのだらうと思って、いつものように作り始めたのですが、うどんのように丸められません。改めて表示を辞書で調べてみると「そば粉」という事がわかりました。日本の伝統食である「そば」がヨーロッパでも食べられていて、スーパーでも売っているほどポピュラーな存在だという事に衝撃を受けました。

～ガレット福島風～



〈材料〉

そば粉	70g	ラジウム卵	4個
豆乳	200cc	ミニトマト	適量
水	50cc	カイワレ大根	1パック
卵	1個	麵つゆゼリー	200cc
バター	10g	(かけそば用の希釈で200cc ゼラチンパウダー 5グラム)	

〈作り方〉

- ① 麵つゆゼリーを作る。
かけそば用の希釈で200ccを鍋に入れ沸騰直前まで温める。ゼラチンパウダーを入れてよく混ぜる。
あら熱が取れたら冷蔵庫で冷やす。
- ② バターを溶かしておく。豆乳と水と卵をよく混ぜる。
バター入れる。
- ③ ②にそば粉を入れる。20分ほど寝かせる。
- ④ フライパンに油をしき、③を薄い円を描くように入れる。
- ⑤ 裏面に焼き色が付いたら皿にのせる。(焼くのは片面だけ)
- ⑥ カイワレ大根、ラジウム卵、トマトをのせる。
麵つゆゼリーでトッピングをする。

アスパラガスのアイオリソース

この時期、フランスで夏の訪れを告げる野菜と言えばアスパラガスです。ヨーロッパではホワイトアスパラガスが主流です。マルシェには親指の太さほどあるアスパラガスが並びます。独特の歯触りとたんぱくな味わいが最高です。

数年前にテレビでやっていた「三ツ星レストランのシェフが作る家庭料理」という番組で、温泉卵を使ったアイオリソースで頂く料理が紹介されていました。油を使っていないのにトロっとしていておいしいソースです。



〈材料〉

アスパラガス	1束
ラジウム卵	1個(固形部分のみ)
酢	大さじ1
ニンニク	少々

〈作り方〉

- ① アスパラガスを茹でて、冷水に入れておく
- ② ラジウム卵と酢を泡だて器でよく混ぜる
- ③ アスパラガスの上にソースをかける。

佐藤淳子(会員)